

山本博之先生・追悼

山本博之先生を偲んで

理事長 河崎 建人

学校法人河崎学園理事、元和歌山県立医科大学学長山本博之先生におかれましては、平成28年12月30日に逝去なされました。山本先生のこれまでの当学園に対する多大なるご功績を思いますと、先生にもうお会いできない寂しさと同時に、これまで先生から賜った様々なご薫陶に対する感謝の気持ちで、万感胸にせまる思いが込み上げてきます。

山本先生と初めてお会いしたのは、河崎医療技術専門学校を大阪河崎リハビリテーション大学へと発展的に組織改編を図っていた時期でありました。故矢内純吉先生のご紹介で、前理事長と一緒に大学教育に対する考え方や医学・医療への想いを拝聴し、すっかり山本先生の教育者、医療人としての魅力のとりこになってしまったことが昨日のことのよう思い出されます。

山本先生は本学の教育方針のあり方や学生への指導方法等について大所高所の立場から建設的なご意見を述べていただきました。特に入学生の学力向上のための日本語力向上プロジェクトは山本先生肝煎りの試みであり、学生の学力向上に多いに貢献していただいています。まさしく先生は柔軟な思考と新しいことを始める行動力に富んでいらっしゃいました。あの柔和なお顔と優しい語り口が私たちに安心感と信頼感を与えて下さいました。そして時には眼光鋭く剃刀のような切れ味のご意見を賜ったことも忘れられません。

山本先生本当にお世話になりました。先生のご期待に沿えるように、大阪河崎リハビリテーション大学の発展に向け、全教職員が一致団結して頑張ることをお誓い申し上げ、お別れの言葉といたします。

山本博之先生・追悼

山本博之先生

学長 亀井 一郎

今から約45年前、私が和歌山県立医科大学のあまり真面目ではなかった学生であった頃、「薬理学」の講義を医学部の古びた教室でお受けしたのが山本先生との最初の出会いでした。当時、先生は新進気鋭の30歳代の若き教授で、恰幅もよく、学生ともよく講義以外のお話もされました。

その後、私が医学部を卒業してからも1～2年に1度、何かの場で先生とお会いできる機会がありました。ご自宅が、以前私が住んでいた場所と近いこともあって、和歌山医大の学長を勇退されて後も、散歩中の山本先生と偶然路上で何度もお会いすることがありました。そんな時いつも気軽に「おう、どうや。忙しくしとんのか？」とお声をかけてくださいました。

4～5年前、私が大阪河崎リハビリテーション大学の非常勤講師として勤務していたころ、先生が特別顧問であることを知り、しばしばお話を伺う機会を得るようになりました。機会を重ねるごとに先生の無限の魅力に引き込まれ、常勤として奉職させて頂くことになったわけです。

山本先生には時に優しく、時には厳しく（叱られた時には、これは「恫喝」？と思うほど怖かったことを憶えております）、ご指導いただきました。

特別顧問室で先生に再会していなければ、私は今頃、当大学にいなかったかもしれません。先生、本当にありがとうございました。

「あのね、センセね、…」と今日もお声をかけてくださり、薫陶をお受けできるような幻想に惑わされています。

山本博之先生・追悼

山本博之先生が本学に残された「遺産」

副学長 寺山 久美子

山本博之先生にはじめてお会いしたのは、私が本学に着任した直後の入学式に参列した平成21年4月でした。それ以前に故河崎茂初代理事長から「河崎学園が専門学校から大学になって4年目となり初の卒業生を迎えることになったが、大学としての形を整え内容を充実させるのはこれからである。特にOTとSTが心配であり、また将来的には大学院も創りたい。そこで、リハ系の大学創りに経験のあるOTの寺山さんと、山本博之先生という医系大学の学長経験のある医師の先生に助言指導役として加わって頂くことにしたい。」という趣旨のお話を頂いていた。以来8年、最近では体調をくずされ大学にお見えになることはめったになくなり、毎週火曜には特別顧問室のソファールにおかけになり、明るくやさしくも謹厳な医学者らしい対応で、学長はじめ各教職員等千客万来状態の中助言指導業務を裁いておられた。小柄ながらオーラ漂うお姿でした。私も「入社同期生」(?)の親近感もあり、また先生の、薬理学者、医学部教授、看護学部開設経験のある学長としての仕事歴からにじみ出る見識あるご意見やアドバイスが伺いたくて、頻繁にお部屋に伺ったものでした。先生の談論は「理」のつく学問(生理学、病理学、薬理学等)を専門とする学者に共通する「理論的、大局的かつ具体的」なもので、しかもユーモアとアイディアに富み洒脱な江戸っ子風のところが、東京人である私にはとても魅力的でした。

山本先生がこうした個別的助言指導や教授会、大学運営調整会議、役員会等での活動を通して残された主な「遺産」を列挙すると次のようなものでした：

- ① OT、STの志願者が増えないことを心配して
大学院構想の吟味、新たな学部の提案(精神保健福祉士の養成等)、和歌山県に重点を置いた広報活動の提案、等
- ② 教員の臨床経験が少ないことを心配して
「精神科リハビリテーション研究センター」を水間病院との提携のもとつくり、教員が現場での臨床活動と臨床研究が可能になるシステムを実現させた
- ③ 教員に対して、「大学人、医系研究者」のあるべき姿を説かれ、科研費はじめ研究費確保へのチャレンジ、科学としての研究のあり方を日常的に説かれた。

こうした「遺産」を引き継ぎ、発展させて行くことが、本学教職員の責務であり、先生への何よりの恩返しとなることでしょう。引き続き本学をお見守り下さい。

ありがとうございました。